

『方丈記』と東日本大震災

【課題①】

『方丈記』の本文を読み取り、質問に答えよう。

経験過去

また同じところかとよ、おびたしく大地震ふること待(き)き、そのさま世の常ならず、山は崩れて川を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土裂けて水わき出で、巖割れて谷にまろび入る。なぎさ漕ぐ船は波にただよひ、道行く馬は足の立ち処を惑はす。

① 「山」・「海」・「大地」はどのような様子であったか。

山 = 土石崩れ

海 = 津波

大地 = 液状化現象

被害をうけたものはない

都のほとりには、在々所々堂舎塔廟ひとつとして全からず、あるいは崩れあるいは倒れぬ。塵灰たちのぼりて、盛りなる煙のごとし。地の動き、家の破る音、雷に異ならず。家の内にをればたちまちにひしげなむとす。

② 家はどのような様子であったか。

家の壊れる音は雷鳴のよう。

家の中にいれば、つぶされて死にそう。



かくおびたしくぶくことは、しばしにて止みにしかども、その名残しばしは絶えず、世の常驚くほどの地震、二、三度ふらぬ日はなし。十日、二十日過ぎにしかば、やうやう間遠になりて、あるいは四五度、二三度、もしは一日ませ、二三に一度など、おほかたその名残三月ばかりや待(まち)りけむ。

1日おさへに 23日に1回

③ 「その名残」とは何を指すか。それはどのくらいの頻度で起きたか。

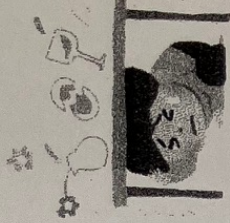
名残 = 余震

すなはちは人みなあなき事述べて、いささか心の濁りもすうらぐと見えしかど、月日重なり、年経にし後は、言葉にかけて言ひ出づる人だになし。

④ 月日経つと人々はどうかになったか。

心の濁りはうすらいだ

口に出している言葉さえいなくなった。



【課題②】

① インタビュー内容の共有をしよう。印象残ったキーワードを書こう。

家の中のものが割れたり、とびが入ったりした。
小学校で先生の指示に従って全員亡くなったという事柄も。

② 東日本大震災のインタビュー内容をふまえて、『方丈記』が書かれた当時の人々の思いを想像してみよう。

地震は突然やって来るものだから、いつ通りが一瞬で失われるような光景を間の当たりにしたと思う。

長く続く地震ほど、物が壊れていく音と身に及び危険を感じて恐怖ではなかったのではなか(この気持ちはいま現代のみなさんにも通ずる)。

③ 鴨長明は、無常なこの時代の中で、必要最低限の暮らしをするか。それを選ばなかったか。あなたは今後のような生き方をしたいですか。それはなぜですか。

いつ起きるかかわらない地震であるから、いつ起きても準備が整っているようにする必要がある。そのために、防災グッズをそろえたり家族で話し合いを行っておきたい。最低限の生活をするのは人生でたった一回だから、地震をおそれて生活をおろそかにするのはダメで、地震と共存できるようにするのが良いと感じた。

